広島工業大学紀要研究編
第52巻（2018）167–176
翻　　訳

シャロレ伯爵（6）

リヒャルト・ベーア＝ホフマン著
松川　　弘*・訳

（平成29年10月25日受付）

Der Graf von Charolais (6)

von
Richard Beer-Hofmann

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Oct. 25, 2017)

裁判長：

まあ，お聞きなさい！　あなたにとって，「牢獄」という言葉は，六つの音からなる響きにしか聞こえないだろうが，私はそれが何であるか見知っているし，自由でないということが何を意味するかを知っているんですよ。野外の生活に慣れ，足の早い馬に乗ることに慣れているあなたのような人には，朝の光の中で輝く山の頂きに毎晩日が沈むことなど分からないでしょう。泥で固めた，天井の低い，かびくさい部屋に，家畜と一緒に押し込められ，いつも飢えながら自分の汚物の中にうずくまって眠る人には，それが分かるのです。豪華な大広間には見えなくても，ともかくそこは牢獄ではないのです。彼らは，そんな粘土と下肥まみれの泥沼の生活を愛惜します。以前，ひとりの坑夫が連れてこられたことがありました。別の坑夫を怒りにかられて殴り殺してしまったのです。彼には妻も，子供も，兄弟もありませんでした。十三歳で，彼ははじめて入坑し，それ以来，四十歳になるまで，来る日も来る日も入坑し続けたのです！　夜明け前に入って，出坑したときは夜です。捕吏が彼を下で捕らえ，上に連れてきたとき，彼は二十六年ぶりに太陽を見たのです。背中を曲げて，長年，腰まで水に漬かりながら，彼は，鉱石を暗闇の中で運び，鉛の毒を吸い込んで，言葉の意味を忘れてしまっていました。私たちが命を助けてやったとき，彼は昼も夜も自由を求めて金切り声を張り上げ，頭を牢獄の壁にぶつけて痛め，「自由」を切望しながら死んでいきました。このような生活でも，彼にはまだ自由だったのです！　伯爵，お願いですから，軽率な行動は慎んで下さい！　申し出を撤回なさい。自由であることを軽んじてはなりません！　まだあなたは自由なのです！　それでよしとしなければ！

シャロレ：

（目を丸くしてじっと彼を見るが，次第に興奮してくる）私が自由だって？！　父の存命中は，私が自由だった，　自由でありえたとお思いなんですか？　彼を取り囲んでいる壁に，私もまた取り囲まれているんです！　彼らが拒絶しても，私は彼のそばにいてやらねばなりません。あの上で彼を一人きりにしておくことはできないのです！　もしも，彼らが私にそれを禁じたら？　彼らにはそれができるんですから！　彼らは鍵を抜き取るでしょう。私の父は，今や彼らのものなんです。彼らの服や靴，床をこするぼろ切れと同じようにね！　彼らが拒絶したら？　父がこんな目にあうのを黙認している私は，恥ずかしくて，日中，どこに身を隠せばいいのです？　夜，私は塔の壁の回りをウロウロしていればいいでしょう。しかし，太陽が昇ると，――それはわれわれを暖め，実物以上に良くみせてはくれますが――その目論見と腕がはっきりしてきます。それは棺の板を通して忍び入り，中で，遺体が柔らかくなるまで，そっと触れるのです。遺体が暖まって柔らかくなると，ま

* 広島工業大学工学部電気システム工学科

ずそれは目を侵し，それから残りの部分を侵食していきます。遺体は膨らみ，発酵し，張り詰め，はち切れて，棺の蓋を持ち上げます。そして

（悲痛な叫びをあげて）

父の体がその中で腐っていくのは，とても我慢ができないのです！

裁判長：

（強い口調で口出しする）

「腐っていく」ですって！　あなたが彼を下で埋葬しなければですか！？

シャロレ：

（ぐったりして受け流す）

私にはそれが分かるんです。それ位の頭はありますよ。 そのことを他人にも言ったのですが，私自身が骨身にこたえていますので，利口ぶった言葉は，今の私には無用なのです！　あなたも父とお知り合いなら，彼がどんな人間であったかご存知でしょう。無口で，生真面目で，彼の人生はすなわち義務に他ならなかったのです！　まあ，いいでしょう，私は諦めています！　彼が死んだことですか？ 最後の銃弾が彼に当たるなんて，皮肉だとは思いますが。でも私のことは，すぐに冬の夜話の種にしか過ぎなくなるでしょう。「可哀想なシャロレ！」という嘆声が聞こえるのが関の山でしょうよ。守るですって！　誰の将来を，誰の現在をです？　あなたはこの犠牲を買い被っておられる。それは，あなたが私の孤独を，貧しさを御存じないからだ！　この剣も，制服も，それどころか喪服すら自分のものではないほどに，私は貧しいんですよ！　貧しくて，孤独なんです！

（強さと苦々しさが，次第に，悲哀と苦しみに転化する）

母が死んで以来，父が私を鞍にくくり付け，その馬を自分の乗馬と並べて駆けさせた，あの日以来，私には彼以外に誰も身内がいないのです。私は天涯孤独なんです！　愛も，友情も，信頼の置ける見慣れたものも，故郷と呼べるようなものも，私は知らないのです！　私の身の回りに大地から壁が，城壁がそびえ立ち，森が茂り，私を守り，隠し，庇護してくれるほどにまで，父の無言のまなざしが私を包んでくれたときにだけ，私はそれらの存在を予感したのです。彼のまなざしが私に贈った愛だけで，私は今まで生きてきたのです。彼は確かに優しくありませんでしたが，私が熱を出して横になっていた時，あの時だけは，私のほてった額にかかる髪をかきあげ，頬をまるで愛撫するかのように撫でてくれました。昨晩，彼の遺体に付き添っている時，私は，目を閉じて，手探りで，あの時彼の指が撫でてくれた跡を探ってみたのです。でも，もう彼の指がこの頬に触れることは二度とないでしょう！

裁判長：

（感動して）

言ってごらんなさい！　その思い出はあなたにとって何を意味するのです？

シャロレ：

私には，それ以外に何もないのです！

（必死の決意をあらわにして，極めて早口で）

私が相続したのは，この思い出だけなのです。私は，これを受け継ぎ，守るつもりです！　必ず！　私の思い出を，他の観念で，恐ろしい観念で台なしにしないでください！ 彼が再び大地に帰れば，大地は彼を受け入れ，守ってくれることでしょう！　その時，彼の運命は，再び人間的なものとなり，私は生き続けることができるのです。彼は，軍司令官としてこの国に属州を手に入れてやりましたが，自分の墓を手に入れることはできなかったのです！　私に，彼の墓を建てることをお許しください！　棺のうえに最初に落ちかかる土くれの音は，私にとって，鐘やパイプオルガンの響きよりもはるかに荘厳に，彼が永眠したことを告げてくれるでしょう！

裁判長：

（彼に優しく慰めの言葉をかける）

あなたのおっしゃることは理解できますが・・・。

シャロレ：

（ぐったりして）

それは無理です！　あなたにはお分かりになるまい！ あなたは，あまりにも年老いておられる。あなたの父上が亡くなられたのは，ずっと昔のことでしょう。私の受けた傷を，自分の古い傷跡から推し測ることは，あなたには無理です！　それに，あなたには，父親の愛を思い出させてくれる愛児がおられないでしょう。あなたが好意をもっておられることは分かりますが，私のことは放っておいてください！　お願いですから！　今の私に忠告や手助けが無用であることは，あなたにもお分かりでしょう！

（そっぽを向き，始めに掛けていた椅子にぐったりと腰をおろす）

裁判長：

（低い声で）

もう，あえて忠告は致しません！

（シャロレを一瞥し，傍聴席の手すりにもたれて見下ろしている娘に目をやる。それから，突然決意して）

でも，多分お助けすることはできます！
（急いで裁判所書記の小机に駆け寄り，合図して書記を呼び寄せる。手短に，きっぱりと，低い声で，非常に早口で）
君は，はじめからそこにいたのか？
（書記はうなずく）
それじゃ，何が問題になっているのか，みんな分かるね。シャロレ伯爵の負債をもしも私が支払うとしたら・・・。

書記：
（びっくりして）
何ですって？　どうしてあなたが・・・？

裁判長：
そうだよ！　金庫に今，蓄えはどれくらいあるんだね？

書記：
お支払いになれるのは，ぎりぎり三分の一というところですね。

裁判長：
いいだろう！　その三分の一は今すぐ支払うとして，残りは，ルクスとソンバノン，必要とあればブズールからの収益を抵当に入れればいい。何年かかるかな？

書記：
三年で，すべて支払えるでしょう。
（ロモントが入ってきて，シャロレと向かい合う。彼らは話し合う）

裁判長：
（座ったり，立ったり，机にかがみ込んでりして，何も書いていない紙に急いで署名する）
これにジュブレイを加えれば，二年で十分だろう！　ここに署名しておいた。外にいる者たちと早速話をつけてくれ。このサインは仮のものだ。あとで本契約を結ぶことにしよう！
（書記を引き止めて）
それからもうひとつ！　私の名前はまだ明かさんでくれ。今は，保証人が見つかったとだけ言っておいてくれ！　それじゃ，行ってくれ！
（書記は，右手のドアを通って急いで退場する。裁判長は，階段を登って娘のところへ行き，彼女と話し合い，しばらくしてまた階段を降り，左手のドアを通って広間から出ていく）

シャロレ：
（ゆっくり前に進み，まだ書記が出ていくのを見守っている。ロモントに向かって性急に）
あれは誰なんだ？　彼はやつらにどうしろと言うんだろう？　彼らはどうして出ていったんだ？　彼らは相談するつもりらしいが，なぜ外でするんだ？　行って，今すぐ決めろと言ってくれ！　もう時間がないんだから。

ロモント：
それじゃ，そんな馬鹿なことはするなよ。何も心配することはない。君はそんなにあわてて入獄することはないんだよ！　そのことを君が切望しているのなら，話は別だが！

シャロレ：
（ぐったりと肘掛け椅子に腰をおろす）
僕がそれを切望しているのは確かだ！　僕は休みたい！出来事はあまりにも錯綜しているし，あまりにも早く進展している！　まず，親父が運ばれてきて，僕は一晩，テントの中でひとりで親父に付き添っていた。そして昨日，親父は，品物のように車に載せられ，今晩は騎行だ。今朝は，あの悪党が憎しみをいらくさの鞭のように僕の顔に叩きつけ，ここにきて，僕の言説はまるで役に立たず，僕は今，自分の言葉が，目的を達成する前に力なく地に沈むのを感じている。ここに立っている僕は，無力で無防備だ。ロモント！　僕は，顔をもたない無言の石になって，牢獄に入っていたいんだよ！

ロモント：
それが実現する可能性はあるね！

シャロレ：
それじゃ，君も彼らがそれに同意すると思うのか？

ロモント：
恐らくね！

シャロレ：
そうだといいが。

（債権者たちが入ってきて，シャロレのそばを通って，自分の席に向かう。廷丁が左手のドアから入ってくる）

ロモント：
おいでなすったぞ！

シャロレ：
（身を起こす）
あんたたちは決心したのかね？

飾り布の仕立屋：
（立ち止まらず，通りすがりに）
ええ。

廷丁：
（ドアを開ける）
起立！　開廷！
（裁判長が，判事と書記を伴なって入廷する。彼らは席につく。左手の傍聴席が再び埋まる）

シャロレ：
（債権者たちに呼びかける）
まあ聞いてくれ・・・。

廷丁：
静粛に！

ロモント：
言われた通りにするんだ。

裁判長：
判決を述べるまえに，この判決をくだす必要があるかどうか，まず聞いておきたい。シャロレ伯爵が先ほど提起した申し出を，原告は受け入れますか？

飾り布の仕立屋：
いいえ・・・。

シャロレ：
（声を張り上げる）
いいえ？

飾り布の仕立屋：
受け入れません・・・。

シャロレ：
なぜなんだ？

ロモント：
静かに！

飾り布の仕立屋：
すべての支払いを保証する保証人が見つかったのです。その保証人は・・・。

シャロレ：
誰なんだ？

飾り布の仕立屋：
信用できる方です。ですから，告訴は取り下げます！

裁判長：
これで判決を下す必要はなくなった。よって，閉廷する。
（彼は，判事と書記を伴なって広間を立ち去る。左手の傍聴席は空になる。バルバラは，右手の傍聴席を去る。デジレーは残っている。債権者たちが，シャロレのそばを通って出口に歩いていく。シャロレは，度を失い，取り乱して，退廷する判事たちを見つめている）

飾り布の仕立屋：
（ドアの近くで）
伯爵様，あの非情な行動をよんどころなく取っていたとき，私が内心とても苦しんでいたことを信じて頂きたいのです。これで私もホッとしました・・・。
（きまり悪そうに言葉を切る）

イーツィヒ：
私が今朝言わなければいけなかったことを，彼が今言ってくれました！

（全員が立ち去る。シャロレとロモント，デジレー，廷丁だけが広間にいる）

シャロレ：
（債権者たちに呼びかける）
待ってくれ！　誰なんだ？
（ロモントに向かって）
あとを追いかけて，彼らに聞いてくれ。

（ロモントは債権者たちのあとを急いで追う）

シャロレ：
彼らはなぜ，保証人の名前を黙秘しているんだろう？
保証人は，一体誰なんだ？

裁判長：
（入ってくる。廷丁に向かって，小声で）

コートを脱がせてくれ。それから，窓を開けてくれないか？
ここは蒸し暑い！

（廷丁は，コートを脱がせて，広間を去る）

シャロレ：
（ひとりひそかに，低い声で）
誰が僕の保証人になってくれたんだろう？
（裁判長がゆっくり，ためらいがちに前の方に進んでくるのに気付く）
なぜあなたは，まだここにおられるんです？　どうしてみんなといっしょに退廷しないんですか？
（裁判長をマジマジと見つめる。それから，ほとんど抑揚を付けずに）
あなたですか？　あなただったんですか？
（裁判長は立ち止まり，黙っている）
あなたなんですか？

裁判長：
（小声で）
私だ！

シャロレ：
（とても早口に，小声で）
乞食に貨幣を与えるように――いともたやすく――負債を全額投げ与えることが出来るほど，あなたは金持ちなんですか？　私の今の状況を，ご存知なんですか？　その金が捨て金になることが，お分かりにならないんですか？　私には返済不可能だということを，知っておられるんですか？

裁判長：
もちろん分かっている。

シャロレ：
それなのに，どうして？

裁判長：
（親切そうに微笑みながら）
忠告しても無駄なので，助けざるを得なかったんだよ！

シャロレ：
（感動して）
その通りです！　あなたは助けて下さったんです！　それも無償で！　路上の乞食のように，今の私には，あなたの前にひざまずくことしかできないのです。
（ひざまずこうとするが，裁判長に止められ，裁判長は彼を抱きとめる）
あなたの腕をすばやくとらえて，口付けし，泣く。今の私には，それしかできない。私はそれほど貧しいのです。

裁判長：
（シャロレの手を軽くなで，感動して，小声で）
可哀想なお方だ！

（廷丁が，傍聴席の窓のカーテンを引き開ける。高く昇った太陽の強い光が，真直に広間に差し込んでいるが，前景は闇に沈んでいる。）

シャロレ：
あなたが今，私に何をして下さったのか，あなたはご存知ないのです！　私は最悪の状態でした。夜がこの身を締めつけ，苦しみと痛み，嫌悪が，私の首を絞め付けていました。そんな時，あなたがこの私を，光の中に引き上げて下さったのです。私は生き，自由に呼吸し，再び希望をもつことができます。もしそれが実現したら，私は，幸福の存在を信じることができるでしょう。まだ別の日々が，楽しい日々が自分に訪れることを，信じることができましょう。そう信じていいのでしょうか？

裁判長：
（手で軽くシャロレの髪をなでる）
その日は，きっとやってくるでしょう！

シャロレ：
自分のことばかり申し上げて失礼しました！　あなたご自身のことをお話し下さい！　あなたはお一人です！　手短かに言えば，よそ者にお子さんを持って行かれるんですよ！　私をあなたのお宅に引き取ってください！　もちろん，婿としてではありません！　父の埋葬の時だけ，もう一度，私を彼の息子にして，シャロレを名乗らせて頂きたいのです！　それから，私はすべてを捨てます！　無一文になり，名無しになります。私はあなたの債務者と呼ばれても構いません。あなたが生きておられる限り！
（入ってきたロモントを出迎える。性急に彼を裁判長のところへ連れていく）
ロモントです！　彼がロモントなんです！
（感謝に我を忘れて，興奮のあまりほとんど吃りながら）
私をあなたのお宅に引き取ってください！　ステッキを手放し，私の腕におつかまり下さい！　やがて，私も，あなたの歩調にうまく合わせて歩くことが出来るようになるでしょう！　毛布を放り出して，私を，あなたのベッドの脚

の端の床に寝かせてください！　私の眠りは浅くて，あなたが少し身動きするだけでも目を覚ませます。あなたが喉が乾いたのなら，私は杯を差し出し，あなたの頭を支えていてあげましょう。――老人にはよく起こることですが――あなたが眠れずに長い間目を覚ましておられるのなら，私は灯をともし，もしあなたがお望みなら，朗読して差し上げましょう。それがもしお望みでなければ，黙って，あなたの言葉に耳を傾けていましょう。あなたのお望みとあれば，灯を消して，闇の中で床の上にうずくまり，あなたのベッドの脚に頬を持たせ掛けていましょう。

（裁判長の手を握って）

私は黙ってあなたの手を抱いていましょう。自分が闇の中でひとりでいるのではないと，あなたがお感じになれるように。あなたが眠りに落ちるまで，誰かが自分のそばで目を覚ましていて，自分を守り，愛してくれていると，お感じになれるように・・・。

（膝をついて）

私をあなたの召使いにして下さい！　お願いです！

裁判長：

（シャロレを引っ張り上げて）

お立ちなさい！

（小声で）

召使いではなく，もしあなたがお望みなら，私の息子になって頂きたい！　あそこにいるのが私の娘なのです。

（上の傍聴席を指し示す。デジレーは身を起こしている。彼女はまぶしい光の中に立っていて，ゆっくりと階段を降り，踊り場のところで立ち止まる）

シャロレ：

（一瞬動揺し，ロモントの方に手を伸ばす）

ロモント！

（不意に差し込んできた日の光に眩惑されて，目を閉じる。ロモントに寄り掛かって，小声で）

これは夢だ！　ロモント！　僕たちは，夜，野原で，町に向かって馬を走らせていたんじゃなかったのか？　僕は，鞍の上で眠り込んで，夢を見ていたようだ。僕はまだ寝惚けている。手綱を握っている感じがしない。

（不満そうに）

僕を支えてくれ，さもないと落馬してしまう。今は夜なんだろう？　僕たちは村を通り過ぎているんじゃないのか？　聞いてくれ，教会の時鐘があんなに大きな音で鳴っている！　黙って，数えさせてくれ！　一つ・・・

裁判長：

あなたは夢を見てるんじゃない。

シャロレ：

・・・三つ・・・

裁判長：

（ロモントに向かって）

彼に教えてやりなさい・・・

シャロレ：

・・・五つ・・・

裁判長：

あなたは目を覚ましているんだ。

ロモント：

目を開けるんだ！　君は夢を見てるんじゃない！

シャロレ：

十二・・・

ロモント：

見るんだ！

シャロレ：

真夜中なんだろう？

デジレー：

いいえ，正午ですわ，伯爵様・・・

シャロレ：

（見上げて）

しゃべってる！

デジレー：

（後ろを指差して）

あそこに太陽があるでしょう！

シャロレ：

（今度は彼女の方に顔を向けて）

見える，見える！

幕

第四幕

（第二幕と同じ部屋。但し，贈り物を載せた机はない。第二幕で，書き物机の左手に置いてあったひじ掛け椅子は，今

度は，窓際に置かれている。窓の張り出しに，彫刻を施した低い長持がある。外の庭は雪に埋もれており，雪がちらちら降っている。遅い午後の陽光が，斜めに部屋に差し込んでいる。
裁判長は窓際のひじ掛け椅子に腰掛けて，本を読んでいる。シャロレは，穏やかな炎がほのかに輝く暖炉を背にして，書き物机についている。入口のドアのそばに，宿屋の主人が立っていて，帽子を手に持っている。）

宿屋の主人：
（卑屈に，しかも性急に）
・・・伯爵様・・・

シャロレ：
（振り返らず，穏やかに）
まだ何か用かね？

宿屋の主人：
（卑屈な非難を込めて）
お返事は頂けないんで？

シャロレ：
秋にすでに「だめだ」と言ったじゃないかね！

宿屋の主人：
それでは，私が頂いて当然の額の半分にもならないんですが・・・

シャロレ：
それで十分だよ。

宿屋の主人：
ですが，他の人々はみんな，私が何かの罪を犯したと思っているんですよ。この秋まで，私が，収穫の販売の斡旋を一手に引き受けていたんですから。裁判長のすべての農園の収穫をね。それを突然，私はやめさせられ，今は，別の二人の方が引き継がれているんです。みなさん，何かが起こったに違いないと思っておられますが，それは誤解です。
（裁判長の方に向き直って）
伯爵様には，私がそこで儲けたわずかな金など，問題じゃないんです。この方は，毎年，その十倍以上小売されてますからね！　その理由は何だとお思いです？　それはただ・・・

シャロレ：
やめろ！

宿屋の主人：
承知しております。伯爵様。私にはその理由を問う権利はございません。もしお望みなら・・・

シャロレ：
（眉に皺を寄せて，しかし穏やかに）
御免こうむるよ！

宿屋の主人：
伯爵様，恐らくそれは誤解に過ぎないんですよ！

シャロレ：
（落ち着いて，強い調子で）
違うね。

宿屋の主人：
（次第に苦しげに，泣きそうになって）
あなたは，至極あっさり「違う」とおっしゃいますが，その「違う」で，私も，私の家内も，年老いた父も破滅してしまうんですよ！　私がそれで生計を立てている，立てざるを得ない，立てるよりほか仕方がない仕事を，あなたは台なしになさるんですか！

シャロレ：
（半ば独り言のように）
ほかに仕方がないだって！　そうかねえ！

宿屋の主人：
その通りですよ！

シャロレ：
本当かね？！

宿屋の主人：
神かけて，相違ございません！

裁判長：
（うんざりして）
あんたの嘘の証人として神を呼び出してもらいたくないね！

宿屋の主人：
嘘はついておりません！

シャロレ：
あんたは嘘をついている。あんたは・・・

宿屋の主人：
私は・・・

シャロレ：
僕は，あんたの別の顔を知っている・・・

宿屋の主人：
宿屋です。

シャロレ：
（話し続ける）
だから・・・

宿屋の主人：
どうしたんです？　だから？　私は宿屋だから，客を泊めてるんじゃないですか？

シャロレ：
「だから」じゃないだろう。あんたは，一体誰をそこで接待し，泊めているんだね？　以前・・・
（嫌悪の仕草で話を中断して）
一度だけ，僕はあんたの所に行ったことがある。三年前だったか，朝早くだ。仮面をつけた，寝不足でしゃがれ声のやつらが，乾き切った喉からほてった息を吐きながら，部屋のドアから忍び出て，人目に付かぬ出口からこっそり出て行った。一人は情事の報酬で潤い，もう一人は，淫蕩に飽き，萎え衰えているが，それでもまだ情欲の炎を燃やしていた。あれは三年前のことだが，今でもこの家の前に立つと，悪寒がするよ。

宿屋の主人：
（嘲笑して）
私の前でもですか？

シャロレ：
（小さくうなずいて）
あんたの前でもだ！

宿屋の主人：
（皮肉と侮蔑をほとんど抑えかねて）
あなたはそれほど品行方正なんですか？

シャロレ：
あんたよりはましさ・・・

宿屋の主人：
私には，それを判断する権利はありません。それは，あなたが判断されることです。

シャロレ：
その根拠を，あんたは聞いたじゃないか！

宿屋の主人：
だから，あなたは私を罰するというわけですね？

シャロレ：
僕には人を処罰する権利はない。でも，嫌いなものを避けることは許されている。

宿屋の主人：
（憤慨して）
それじゃ，私がそれを嫌いじゃないとでもお思いなんですか？！　私が喜んで売春婦を斡旋しているとでもお思いなんですか？　彼らのために喜んで寝床を用意しているとでもお思いなんですか？　彼らの発情を助けてやり，情欲の高まりを見聞きするのを楽しんでいるとでもお思いですか？　青二才に馬鹿にされ，彼らの冗談にゲラゲラ笑い，彼らに命じられてとぎれとぎれの声で歌い，あとで彼らの嘲りのほめ言葉を真に受ける振りをすることが，楽しいとでもお思いなんですか？

裁判長：
（厳しく）
じゃあ，なぜそんなことをするんだ？

宿屋の主人：
生きるためですよ！

裁判長：
（不機嫌に）
なぜ，よりによってそんなことをするんだ？　まっとうな仕事をしていれば，食いはぐれはない！

宿屋の主人：
確かに，パンと水だけは手に入るでしょう！　でもね，私だって，たまにはローストを食べ，ワインくらい飲みたいですよ！　夜まで，肩ひじ張って寝たくありませんよ！　何グロッシェンかは，余分に財布の中に持っていたいですよ！　老後を安らかに送りたいですよ！　かいせんにかかった老犬のように汚物まみれでくたばりたくはないですよ！　もっと安楽な暮しがしたいですよ！

シャロレ：
（いらいらして）
これ以上そんな破廉恥な商売を続けてみろ！

宿屋の主人：
（苦笑して，憎々しげに）
ええ，破廉恥ですとも！　私がもしあなたのように自分の地所で裕福に暮しているとしたら，安んじて廉恥心をもつことができるとは思いますがね！

裁判長：
（立腹して）
我々のことには構うな！

宿屋の主人：
あなたがたも私と同類ですよ！　ただ，運命があなたがたに切り札を全部手渡しただけのことです。私にはつきがないんです！

裁判長：
つきだって！　人には自分に相応しい運命ってものがあるんだ！

宿屋の主人：
（叫び声をあげる）
相応しい？
（頭を抱えて）
あなたがそんなことをおっしゃるんですか？　ご老体が？　裁判官が？　あなたは，五十年も人々の運命がご自分の前にさらけ出されるのをご覧になってこられたんでしょう？
（意地悪く）
あなたは，ご自分の白い指輪をはめた手を，血と金と汚辱の混乱のなかに，それがほぐされ，整えられてあなたの前に置かれるまで，突っ込んでおられた。それなのに，まだ・・・？
（笑い出す）
つきです，つきがすべてなんです！
（肩をすくめる）
私にはそれがなかった！

裁判長：
（さげすむように）
彼らはみんなそう言う・・・。

宿屋の主人：
誰のことです？

裁判長：
お前さんのような奴らさ・・・。

宿屋の主人：
（立ち上がる）
私のような？　私が一体どんなだとおっしゃるんです？　私が何者なのか，あなたはご存知なんですか？
（落ち込んで）
自分でもそれが分からないんです！　私に分かるのは，ただ自分が何者であったかということだけです！
（大きな目が潤み光って，今にも泣き出しそうである。小声で低く話し始めるが，次第に語りのテンポと力強さは増していく）
確かに私は善良でした！　高慢ではありませんでした！　みんなが私の歌に金を払うようになるまで，私は酒場の給仕をしていました。うぬぼれも強くはありませんでした！　震え，大きくなり，上昇し，揺れ動く私の声に合わせるように，コルセットの下で女たちの胸のときめきが高まっていくのが分かりました！
（思い出に浸り，顔が明るくなる）
私は好色漢ではありません！　ただ，出されたものを受け取っただけです。私が最初でもなければ，最後でもなかったのです！　私は吝嗇でもありませんでした！　惜し気なく与えました！　皮肉屋でもありませんでした！　私に歌声を授けてくれた主を讃えて，聖堂で敬虔に歌いました。
（苦笑して）
風が，春風が吹いて，私から声を，それとともにすべてのものを奪っていったのです！
（シャロレたちを軽蔑するようにまじまじと見て，厳しく）
私だって，あなたたちと同じように絹の胴着を身につけ，選り抜きの指輪をはめていたんです。あなたたちのように敬われ，何度も言い寄られました！
（尊大ぶらずに）
あなたたちのように，卑俗なものに対して嫌悪を抱いていました・・・。これらすべてを，風が無に帰せしめたのです！　私は何者なのです？　あなたがたは何者なのです？
（うなずいて）
あなたたちは，それをご存知なのですか？
（非常に厳しく，脅迫し警告するように，腕を高く振り上げて）
風があなたがたの虚偽を罰しはしないと，確信できますか？

裁判長：
（いらいらして）
何が言いたいんだ？

宿屋の主人：
（普段の口調に戻って，低い声で）
ええ，私はもう行きます。どうも顧客を無くしてしまったようですね。分かってはいるのですが
（肩をすくめて）
少なくとも，一度は，自分の心中を存分に吐露しておきたかったんです！　では，失礼致します！
（立ち去る）

裁判長：
猫かぶりめ！

シャロレ：
（しばらく当惑し，立ち上がって書棚から紙挟みを取り出す）
最後の部分は本心だったようですね！

裁判長：
おしゃべり屋め！

シャロレ：
（考え込んで）
でも，あの口調には，何かが秘められていました・・・。
（話をやめて，机につく。庭の戸を通って，デジレーが入ってくる。彼女は，丈の長い毛皮のコートを着ている。通りすがりに，裁判長の手を軽くとらえて，自室に向かう）

シャロレ：
（彼女に微笑みかけて）
もう戻ったのかい？　門が開くのは聞こえなかったが。

デジレー：
庭を通って来たんです。バルバラ！
（シャロレの安楽椅子の後ろに立って，彼に向かって）
外はみんな雪に埋もれてますわ。庭の端の小さな戸が，なかなか開かなかったんです。前に雪がどっさり積もってましてね！
（バルバラが入ってきて，デジレーの毛皮のコートを脱がせ，庭に通じる戸を開けて，敷居の上に立ち，コートについた雪を振るい落とし，それを片付けようとする。デジレーが，暖炉の左手の肘掛け椅子を指し示す）
あそこに広げて干しておいて！　それに替えの靴を！
（バルバラは出て行く。彼女が部屋に入る前に，デジレーは尋ねる）
あの児はもう寝たの？

バルバラ：
まだです！　もう床に就いてはおられますが，まだ歌を歌っておいでで。

シャロレ：
（微笑みながら）
一体何を歌っているんだい？

バルバラ：
「冬になっても，あんたは私を奪わない・・・」 きっと女中たちが歌うのを聞かれたんですよ！ 「ねぇ，もう私を奪ってくれる？」
（彼女は立ち去る。裁判長は，立ち上がって彼女の後を追う）

デジレー：
中に入らないでね！　あの児がまた目を覚まして，眠りたがらなくなるから！

バルバラ：
（戻ってくる。手に軽い靴を持っている）
今，旦那様のお声を聞き付けられて，旦那様を呼んでおられます！
（デジレーは，暖炉の右手の肘掛け椅子に腰を下ろしている。バルバラは，彼女の前にひざまずき，靴を脱がせる。しばらくして，デジレーは，足を暖炉の炎に向けて差し出し，バルバラに新しい靴を履かせてもらう。シャロレは立ち上がる）

デジレー：
（微笑みながら）
そこにいらして下さい！

シャロレ：
あの児が呼んでいるんだよ・・・

デジレー：
すぐにまた，おとなしくなりますわ。あなたはあの児に話しをなさり過ぎます。それも難しいお話ばかり。

シャロレ：
（前にある書き物机にもたれ掛かって）
あの児と話しているんじゃないよ。あの児の前で，自分自身と話しているんだ！